

“「風」を起こすとき”

大工原秀子さんとお目にかかり、お話をする機会に恵まれたことは、偶然の産物以外の何物でもなかったが、誠に貴重な出会いであったと、今にして思う。当時私は、社会福祉系の大学を出たばかりの社会人1年生で、東京都社会福祉協議会に就職し、初めての職場である高齢者の職業紹介所に勤務していた。業務の中で、1か月に1回程度、担当地域内の老人福祉センター等に出張して職業相談を行っていたのだが、その中の一ヶ所に、保健婦であった大工原さんが勤務しておられた。

正直に告白すると、初めて出会った大工原さんの第一印象は、私の予想に反して、実に穏やかで大方な方であった。1970年代、今以上にタブー視されていた高齢者の性の問題に着目し、職場の上司の反対を押し切って実態調査を行い、問題提起をしたという「あの」人物と、私の目の前でこやかにほほ笑まれている方が同一人物とは思えず、一種の違和感すら覚えた。

その鷹揚な外見の一方で、初対面での僅かな対話からだけでも、切れ味鋭いモノの見方のできる方であることが理解できた。「物腰穏やかなだけでなく、颯爽として実にカッコ良い…」一陣の「風」を感じさせるイメージが私の脳裏に焼き付いた。正確なフレーズはすでに思い出すことができないが、「人に言い難いことだからこそ、専門職が相談する意味がある」という趣旨の発言は、働き始めたばかりの私に大きなインパ

クトを残し、今でも折に触れて思い出すことがある。人を支援することの難しさ、人がその人らしく生きていくことの機微などを、全くわからずにいた20代の私ではあったが。

暫くぶりで大工原さんのことを思い出したのは、最近刊行されたスウェーデンの高齢期の人々の生活を描いた本の中で、「高齢者介護における性の問題」や「同性愛者の人々の老後」が現代的課題として取り上げられていたことが目に留まったからである。

「性」の問題を論じるということは、結局のところ、人々がお互いの価値の差異を認め、尊重し合えるかどうか、つまり個々の多様性というものを真に認め合える社会かどうか問われることに行き着くのではないかと、現在の私は思っている。

時代は21世紀の幕を開け、既に10年が経過している。表面的な豊かさや安心・安全が音を立てて崩壊し、言いようのない閉塞感で身動きが取れなくなってしまっている日本の現状。1992年に世を去った大工原さんが、現代の日本で活躍であれば、一体どんな「風」を起こされるのであろうか。「目の前にいる人々こそが、答えを持っているのよ。」と、一瞬、その声が聞こえたような気がした。

飯村 史恵

(ジェンダーフォーラム運営委員 / 本学コミュニティ福祉学部准教授)



Gemとは…光り輝く宝石。Gender Encountering at Mitchellを表します。「ミッチェル館でのジェンダーの出会い」の意です。

「平等」と「保護」をめぐる新たな困難

2009年9月に刊行した著書『働く女性とマタニティ・ハラスメントー「労働する身体」と「産む身体」を生きる』が、2010年度（第30回）の山川菊栄賞を受賞した。山川菊栄は、改めて言うまでもなく、近代日本を代表する思想家・理論家であり、女性解放運動において、与謝野晶子、平塚らいてうとともに、大きな足跡を残した人である。特に、1918年から1919年にかけて、この三者の間でなされた「母性保護論争」はよく知られている。女性の経済的独立を重視した「平等派」の晶子と、国家による母性保護を主張した「保護派」のらいてうに対し、菊栄は「平等」と「保護」は相反するものではなく、両者を獲得するために社会や経済のあり方そのものを問い直さなければならない、という立場をとった。ここで提示された「労働」か「母性」か、「平等」か「保護」か、あるいは両者を両立させることは可能か、といった問題は、現在も解決されることなく、むしろますます切実な課題となっており、私たちに迫っていると断言していいだろう。

私自身の研究も大きく言えば、この「労働」と「母性」の両立、という問題意識から出発している。冒頭にあげた本は「女性労働者の妊娠期の働き方」についての調査・研究をまとめたものである。矛盾するとされる「労働する身体」と「産む身体」を、一人一人の女性がどのように生きているのか、さらに、現状の職場で「平等要求」と「保護要求」の「両立」は果たされているのか、それらを明らかにしたいと考え、取り組んできたものだ。しかし、そこから見えてきたのは、均等法以降の「平等」原則が逆に女性たちを追い詰めているのではないかと、という新たな疑問だった。

男女雇用機会均等法施行から25年あまり、その後、男女共同参画社会基本法も制定され、法制度的には男女平等が追求されてきた日本の社会だが、その現状は、実質的な平等が勝ち取られないまま「男女で同じ扱い」という平等原則のみが、職場や人々の意識に浸透したのではなかったろうか。ジェンダーに中立な立場とは、一つ間違えれば、女性の身体性や女性たちが置かれている現実を無視し、「同じ」という「原則」が独り歩きすることにもなりかねない。調査事例にあったのだが、「なぜ、妊娠した人ばかりがかばわれたいといけななんだ」という男性の発言は、そのわかりやすい例だろう。「平等であるべき」という原則が、女性の身体性を無視するための方便に使われているとしたら？ 私たちは「平等」と「保護」をめぐる新たな困難に直面している、と言わなければならない。そして、その困難を突破する方法を、見つけていかなければならないのだ。

本研究をすすめるなかで、ジェンダーフォーラムのロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金を受けた。「マタニティ・ハラスメント」という、学術の世界では未知の概念を用いて始めた研究を応援してもらったことに、改めてお礼を申し上げたい。

杉浦 浩美 (本学兼任講師 / 同社会福祉研究所研究員)



立教大学ジェンダーフォーラム

開室日 : 毎週月曜日～金曜日
 開室時間 : 10:00～16:00(月火木金) 13:00～18:00(水)
 場所 : 立教大学池袋キャンパス ミッチェル館 1階
 TEL&FAX : 03-3985-2307
 E-mail : gender@rikkyo.ac.jp
 URL : http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/

詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板またはHPでご覧ください。

■案内図



第52回 ジェンダーセッション(2010年12月21日(火))

「クィア・ロマンス—少女映画の力学」

話題提供：菅野 優香 氏(京都大学人文科学研究所研究員)

異性愛を当たり前とする社会では同性間の親密さは「友情」、異性間のそれは「愛」であり、両者は異なる…ということになっている。だが改めて考えてみると、「友情」と「愛」の間に境界線など引けるのだろうか。今回のジェンダーセッションで菅野優香氏が企てたのは、近年の日本の「少女映画」で「友情」と見なされてきた女性同士の親密な関係の読み直しである。『NANA』（2005年）、『下妻物語』（2004年）、『かもめ食堂』（2005年）が取り上げられた。

『NANA』は二人のナナ（一方はハチと呼ばれる）の女性同士の「友情」と、ナナとレン、ハチと章司の男女間の「愛」を描いた映画である…と通常は解釈されている。だが、菅野氏は映像を交えながら、ハチがナナを見る視線や「ねえ、ナナ」で始まるハチのナレーションを通して、女性同士の親密な関係が表向きの主題である異性愛プロットを凌駕している点を指摘した。そこで印象深かったのは、ナナがハチの唇にキスをする場面の分析である。あくまでも「友情」の表現として描かれるナナのキスは、ナナとハチの親密さをエロティックではない「友情」として片付けてしまう効果を持つというのである。直接的な身体接触が逆説的に同性愛嫌悪を出現させるという菅野氏の見解に私も深く共感した。

そもそも「少女映画」とは何か。菅野氏の定義によれば、登場人物の年齢とは無関係に「少女性」を表現し、「成熟」に抵抗する映画を示す。その意味で「少女映画」に他ならない『かもめ食堂』では、フィンランドを舞台にサチエ、ミドリ、マサコという三人の女性の親密な絆が繰り広げられる。二人ではなく三人という点でも、それは既存の言葉では名づけ得ぬ関係であり、年齢を重ねた女性たちが、制度に囲い込まれることなく、いかなる関係を作っていくのかというテーマもそこからは見えてくる。「少女映画」においてこうした問いが提起されていること自体が非常に興味深かった。



ところで、サチエと出会う場面でミドリは『ムーミン谷の夏まつり』を読んでいる。『ムーミン』で描かれるのは非規範的な家族であり、作者のトベ・ヤンソンも同性のパートナーと生涯を送った人である。菅野氏は『かもめ食堂』に突然登場する『ムーミン』の本を「テキストのしみ」と呼び、女性三人の親密な関係の兆候をそこに読み込んでいく。そして、『かもめ食堂』におけるこの『ムーミン』のようなテキストのある種の過剰さ、また、『NANA』においてハチの視線や声によって異性愛プロットが乱される瞬間に「クィア」を見るのである。それは「友情」と「愛」の間を揺れ動きつつ、どちらにも固定されない運動性としての「クィア」であり、観客である私たちをも巻き込み、新たな関係を思い描かせてくれるものなのである。菅野氏のクィアな読みが私自身も巻き込まれ、多くの刺激を受けたセッションであった。

黒岩 裕市（本学兼任講師）



～ジェンダーフォーラム提案の全カリ授業紹介～

【2010年度全カリ総合B科目】

「社会規範とセクシュアリティ—愛・身体・欲望」コーディネーターをつとめて 「セクシュアリティをめぐる対話」

2010年度後期、池袋で開講された全カリ総合B科目「社会規範とセクシュアリティ—愛・身体・欲望」のコーディネーターを務めたが、190人あまりの受講者および4人の講師と、極めて豊富な対話の時間を共有できた。

これまでさまざまな角度からジェンダーを扱ってきた総合B科目においても、セクシュアリティをテーマにしたものはなかったという。周知のとおり、現在「性」は、大まかにいって3つの次元から認識・議論されている。まず「人間身体が何らかの性をもつ」という次元を表すセックス（だから海外旅行で見る入国審査書類には、性別欄にsexと書いてある）。次に、そうした「《性をもつ》という事実が社会的にどのように意味づけられ、また、どのような結果を招いているか」という次元を指すジェンダー（女性蔑視などは、よってジェンダーの問題である）。そして第3の次元、セクシュアリティは、近年その2つのカテゴリとは別個に重視されるにいたった概念である。

セクシュアリティは、人がみずからをどの性別に属すと見なすが、また誰を性的に愛するか、という局面に注目する「性自認」や「性志向」から、人の生きる力にも大きな影響を及ぼしている「性幻想」まで、実にさまざまな要素を表す多義的概念である。おそらくこのコンセプトの最大の意義は、ある「自己」が社会と向き合う時、どうしても——あるいはなぜか——問題となるおのれの性を、その人個人がどう理解するかということに一切の関心を寄せているという点にある。

「世間は私を男だと決めつけるが、断定されてしまった事実には違和感がある」、あるいは「私は女だが、女性を恋い慕わずにはいられない」などという個人的実感が、セクシュアリティのかなめであるのだ。そして、そうした感覚の多くのものが、自分の意図とは無関係に与えられた身体と、さらにはその身体を管理する社会の両方と葛藤することになる。例えば日本国憲法にある「両性」という語は、そうした規範のあらわれだ。ここで国民と呼ばれるのは、男女という、たった二種類のカテゴリになじむ個人だけである。

「社会規範」と「セクシュアリティ実感」とのこうした葛藤を、多様な文化創造活動に見いだしていくのが、本授業の目的であった。中村美亜先生が細解いたセクシュアリティ認識のメカニズム、小泉恭子先生が示したポピュラー音楽における性差の越境、大串尚代先生がつまびらかにした少女漫画に秘められた欲望、黒岩裕市先生が明らかにした日本近代文学における同性愛観念。これらはみな、作品の創作者（＝作家）と受容者（＝リスナーや読者）がともに、性規範から距離を置き、意識的・無意識的に作り上げた対話と創造の空間なのだ。

この講義の受講者は、必ずしもみな、自己のセクシュアリティに意識的であったとは思わないし、規範に対する違和感もなかった人もいたであろう。しかし、多くの人がそれぞれに、創造へいたるせめぎ合いに意義を見だし、自己の経験を見直してくれたことが最大の収穫だ。このセクシュアリティをめぐる対話は、2011年度には、総合B科目「クィアとは何か?」に継承される。そこでは新たに、規範の変化の可能性をより制度論的に討議する。さらなる展開に期待したい。

新田 啓子（ジェンダーフォーラム所長／本学文学部教授）

「現代社会とジェンダー」を担当して

デンマークでの海外研究期間が折り返しの時期にさしかかった頃、翌年に研究休暇をとられる佐野信子先生（コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科）から、全学共通カリキュラム総合B科目「現代社会とジェンダー」の担当を依頼された。運動生理学、コーチ学を専門としている私に、この分野の話をすることは難しいのではないかと思われたが、学生たちにとって必要な科目であると考え引き受けることになった。4月になり、不安は増すばかりであったが、私の心構えとして、毎回のゲスト・スピーカーの方々のお話を聞き、履修している学生と共に、「ジェンダー」の視点から明らかになった諸学問、社会の様々な場面に潜むジェンダーバイアスに関する知見を学ぶ（シラバスより抜粋）ことを目指すことにした。ところが、初回の授業前の打ち合わせの際に、兼任講師として共に本授業を運営していく岸澤初美先生から、「デンマークで感じられた、ジェンダーに関する事例があれば、学生にお話し下さい」と提案され、とっさに思いついた事例を紹介することになった。何人かの学生からのリアクションペーパーにも、好意的な反応が記述されていたので、ここで紹介したいと思う。ただし、これらの事例は、しっかりした裏付けをとっていないので、個人的に感じた事例として受け止めていただけると幸いである。

- 働かない妻に対する疑問
家族について話していると、必ず「妻の仕事は何だ?」と聞かれた。「日本で、数年前まで病院で仕事していたが、デンマークでは働いていない」というと、「どうしてだ?」「働かなくて、精神衛生上、大丈夫なのか?」という人たちもいた。ここでは、男性も女性も働く機会と同じで、役割に男女差がない国であることが再認識できた。
- 子供手当の振込先は母親の銀行口座しか認められない
制度として、母親の銀行口座にしか支給することが出来ないということだった。担当者に、「私たちは1年しか滞在しないし、両親とも働いていないので（働いていないのに、子供手当が支給されるのもすごい）、父親が光熱費のための口座しか持っていない」と説明しても、「この国のルールでは、子供手当を支給できない」という。支給期限が迫っていたため、その帰り道にあわてて妻が口座を開設した。働く機会は男女均等でも、子供の養育は母親の仕事という意味合いが強く、すこし不自然な感じがした。
- 学級閉鎖を行わない
私たちが、滞在している年は、世界的にインフルエンザが流行していた。学校を休む児童が多い時もあったが、デンマークでは学級閉鎖は行わない。なぜなら、働いている両親は、病欠でない子供の世話をするために、仕事は休めないからだ。ところどころ、新聞によると、デンマーク国内で初めて、コペンハーゲン・インターナショナル・スクールがインフルエンザ蔓延を懸念して閉鎖した。私の子供たちが通っていたのは、別の学校で、デンマーク人クラスを併設するインターナショナルスクールであったため、決して閉鎖されることはなかった。これも、男女均等に、働く機会を提供している国の特徴を示す出来事だった。
- バギーを押しながらもランニングできる
最後は、私の専門分野から。男女ともに、とにかくランニングが好きな国民だと思う。幼児を普通のものよりも頑丈なバギーに乗せて、バギーを押しながらランニングする父親、母親を多く見かけた（写真はコミュニティ福祉学会誌「まなびあい」第3号に掲載されている）。育児をいっわけにせず、しっかり運動する国民性にも、大変感心させられた。

ゲスト・スピーカーの方々のお話からは、以上の事例が日本で見られるようになるには、まだまだ時間が必要であることを痛感させられた。履修した学生たちの考えを揺さぶることができる、大変貴重な授業であった。

安松 幹展（本学コミュニティ福祉学部准教授）



ジェンダーフォーラム活動紹介

2011年度を迎え、はじめて「Gem」をお読みになった方も多いのではないでしょうか。今回はそんな新入生の皆さんや、まだジェンダーフォーラムのことをよく知らない方に向けて、ジェンダーについての教育・研究の拠点として、フォーラムがどのような活動を行っているのかを、簡単にご紹介したいと思います。

〈ジェンダーフォーラムの主な活動〉

講演会・勉強会・交流会

◆公開講演会

年1回、6～7月に開催する講演会です。毎年ジェンダーに関わりの深い講師をお招きしています。

◆ジェンダーセッション

年数回、不定期に開催される少人数型の勉強会です。毎回1つのテーマを決め、報告者の発表後には、参加者の皆さんと意見交換をする時間を設けています。

◆コーヒーアワー

月1～2回程度、フォーラム事務室で開催されるアットホームな交流会です。

授業

◆全学共通カリキュラム総合教育科目B群科目

全学部・全学年の学生が履修できます。多彩なゲスト・スピーカーを招いて、ジェンダーに関わる現代的なテーマを扱っている人気の科目です。

奨学金

◆ロザリー・レナード・ミッチェル奨学金

ジェンダーの視点に立って行われる活動・研究の奨励を目的とした奨学金です。

広報物

◆活動紹介リーフレット

活動をわかりやすくまとめたリーフレットです。新入生には1部ずつお渡ししています（2011年度からデザインが新しくなりました）。

◆年報（年次報告書）

年間活動、投稿論文などをまとめた報告書です。

※ISSN 2185-3789

◆ニューズレター「Gem」

この冊子です。イベントの報告やコラムなど、盛り沢山の内容です。

これらの活動は、ジェンダーフォーラムのHPでも紹介しています。イベントの開催レポート等も掲載しておりますので、是非ご覧ください。
<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/>

矢島 毅昌／田中 杏子（ジェンダーフォーラム事務局）